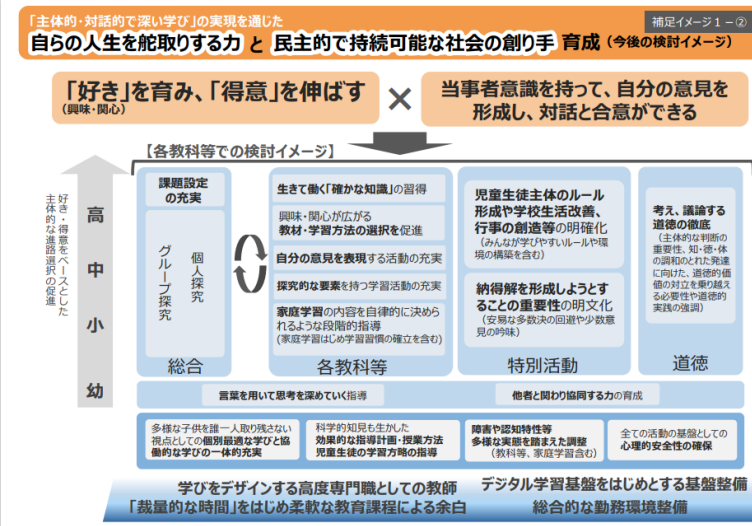




- 子供の主体性を引き出す授業デザイン
- 成功体験を実感できる場の設定と失敗できる環境づくり
- 対話と承認の仕組みづくり

しかし、全国学力・学習状況調査、福岡県学力調査、学力診断テスト等の結果を踏まえると、生徒の姿が見えてくる。全国学力状況調査の質問調査において、「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することができている」という項目の肯定的回答は全国平均と比べて、7.2 ポイント低くなっていること、「課題の

解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる」という項目の肯定的回答は全国平均と比べて、11.2 ポイント低くなっている。こうした現状から、各教科の授業における課題を捉え、自ら課題に取り組む、課題に対して〇〇という視点を生かすと解決するといった点を考える場面に関して課題があるといえる。

また、以上のような生徒の現状を踏まえ、学校経営要項において、「自らの手でよりよい未来を創ることのできる生徒の育成」という学校教育目標に向けて、8 年度の重点目標として、以下の3つの重点目標が設定されている。

- (1) 「なりたい自分」になるため、自己ベストに向け励むことができる生徒（自律）【目標設定力；なりたい自分】

(2) 仲間とともに、自分のまわりのために役に立とうとすることができる生徒（協調）【人間関係形成力；つながる力】

(3) 自分と自分に関わる人すべてを大切に、ポジティブ思考で課題を乗り越える生徒（実践）【自己認識力；しなやかな心】

令和 8 年度の学校経営要項では、校内研究における取組が、重点目標(1)「なりたい自分」になるため、自己ベストに向け励むことができる生徒」の達成に向けて、位置づけられている。

以上の生徒の現状を踏まえ、教育活動や授業づくりにおいて、自分の目標を明確にし、自己ベストに向けて課題解決に取り組む、自分の得意や課題、教科内容に対する理解度を明確にする。そのうえで目標に向けてどのように階段を上る、作戦をたてるかを自分自身の力で考え、実行することができるといった場面を大切にすることが重要となる。

(3)これまでの研究の歩みから

本校では、令和6年度より「自ら学ぶ生徒を育成する学習指導法―生徒を主語にした単元デザインを通して―」といて主題に基づいて、校内研究を推進してきた。主題設定の理由は、以下の2点である。1点目は生徒の実態である。学校評価アンケート等の結果より、授業中の生徒の学びに向かう姿勢は受け身であり、「わかったつもり」、「できたつもり」の状態で満足し、学習内容を定着させることができていない生徒が多数いるという実態である。2点目は、教育改革の動向である。中学校学習指導要領解説総則編や田村（2018）を手がかりに「主体的で対話的で深い学び」には単元を見通したデザインが必要であるという教育政策の動向を受けて研究を推進してきた。

ここまで述べた背景を踏まえて、以下のような生徒像を目指して研究を進めてきた。

- 単元のゴール像を捉え、問題解決についての見通しをもつ生徒

○問題解決の過程で、自らの考えを表出したり、再構築したりする生徒

○自らの学習の過程を振り返る生徒

単元を通してどのようなことを学ぶのか、ゴール像を共有する「見通す」段階、アウトプットを伴う学習課題・活動によって自らの考えを表出し磨いていく「学び深める」段階、単元全体の目標に対して、どこまで達成できたか、何ができるようになったか「振り返る」段階という3つの段階を意識して単元をデザインする研究を進めてきた。

主題研究を踏まえた、令和7年度の学校評価アンケートの結果を分析したものが以下に示す表1である。アンケートの結果を踏まえた主題研究の課題として、大きく以下の2点を指摘することができる。

【表1】学校評価アンケートの分析結果

重点項目	判断の根拠とした数値 (R7 後期データ)	分析結果 (一致・乖離の状況)
1. 振り返りの活動	【生徒授業評価】 全教科平均で「④まとめ・振り返り」が最も低い（例：国語 2.72，社会 2.88）。【教師自己評価】 「めあてとまとめのある授業」は 3.12 と高め。	【大きな乖離】教師は「振り返りの時間を設けている」が、生徒は「自分の変容や学びを実感する場」として捉えきれていない。
2. 見通しをもった学習	【生徒生活アンケート】 「見通しをもっている」肯定率が約 43%と、他項目に比べ低い。【教師自己評価】 「年間計画・授業構想」は 3.0～3.1 で推移。	【乖離】教師側の計画（教える順序）が、生徒側の「学びの見通し（自分はどう進むか）」に翻訳されていない。

（令和 7 年度実施の学校評価アンケートを Gemini で分析）

1点目は「振り返る」段階の質である。生徒を対象にした授業評価の結果では、「④まとめ・振り返り」にする項目が最も低い数値となっていた。教師を対象としたアンケートにおける「めあてとまとめのある授業」という項目は、平均値が3.12となっており、この数値から「振り返り」の時間は設けられているものの、生徒自身が自分の変容や学びの価値づけのための「振り返り」となっていないことが指摘できる。2点目は、生徒が「見通し」をもった学習を進めている実感が相対的に高くないことである。生徒を対象にした学校評価アンケートの結果、「見通しをもっている」という項目に対し、肯定的な回答を行った割合が43%と他の項目よりも低い値となった。

また、令和7年度の主題研究のまとめよりによれば、「見通す」「学び深める」「振り返る」というそれぞれの段階において【表2】に示すような成果と課題をまとめることができた。

表2：令和7年度 主題研究のまとめより抽出された成果と課題

【主題研究のまとめから挙げられる成果】
「見通す」段階：生徒の関心を惹き、課題を共有する工夫 「学び深める」段階：対話と可視化による思考の活性化 「振り返る」段階：自己調整に向けた意識付け
【主題研究のまとめから挙げられる課題】
① 学ぶ「必然性」のある課題設定の追求 単なる「やってみよう」という活動に留まらず、生徒が自分事として解決したくなるような「動機」や「必然性」を生む仕掛け（相手意識や状況設定）をさらに精査する必要がある。 ② 「見方・考え方」を働かせる発問と資料の精選 教師が答えを絞り込みすぎず、生徒が教科特有の「見方・考え方」を働かせて探究できるような、適切な難易度の資料（根拠）の提示や、意図的な発問・問い返しが求められている。 ③ 授業時間内における「振り返り」の質の確保 活動に時間を割きすぎ、終末の振り返り時間が不足する傾向がある。単元全体を見通した時間配分を工夫し、1時間の学びが単元のゴールにどう繋がったかを深く自覚させる時間を確保する必要がある。

（主題研究のまとめより抽出し、掲載）

学校アンケートの結果【表1】と主題研究のまとめ【表2】を合わせると見てみると、「振り返り」の段階をどのようにデザインするかという点が共通して課題として指摘されている。また、主題研究のまとめの記述に関してみると、「見通す」段階や「振り返る」段階については、課題設定の質や課題解決を促すための発問や資料の精選といった「質」が問題になっているのに対して、「振り返り」の段階については、「単元全体の時間のバランス」「時間の確保」など、「振り返り」の本来のねらいや意図が達成できていない状況にあるとわかる。

以上のような研究の歩みと研究主題に基づく学校評価アンケート、令和7年度の主題研究のまとめの結果を踏まえて、令和8年度の研究の方向性について考察する。教育政策の動向や生徒の実態を踏まえると、「主体的で対話的で深い学び」の実現に向けた「生徒を主語にした単元デザイン」という研究の大きな方向性は、継続するがある。その上で、令和8年度は、研究の課題として、「生徒を主語にした単元デザイン」を前提としつつ、単元や授業における「振り返り」の目的や意義、方略を再度丁寧に確認する。その上で「振り返り」を行うことが、次の学びの目標設定や、課題を解決するための方略を明確化にすることにつながる点を究明する必要性があると考えられる。

2 主題及び副主題の意味

(1) 「自分の航路」を切り拓く学びとは

「自分の航路」とは

単元や各授業で明確化されるゴール像を踏まえ、どのような内容に注目するとゴールに近づくことができるか、どのような根拠を選び、どのような方法で思考するとゴールに近づくことができるか、明確にした学びの目指す先（ゴール）と目指すまでの道筋（プロセス）のことである。

「自分の航路」を切り拓く生徒とは

単元における課題を捉え、自分の課題として受け止めつつ、課題の解決に向けてどのように取り組むか、どのようにすると解決に向かうか明確にした上で（自分の航路を考える）、実際に目標や目標に向けての道筋に沿って実行する（「切り拓く」）ことである。

先に述べたように、中央教育審議会（2025）において、「主体的・対話的で深い学び」を通して、予測困難性が高まる中で、「生涯にわたって主体的に学び続け、多様な他者と協働しながら、自らの人生を舵取りすることができる民主的で持続可能な社会の創り手をみんなて育む」ことが目指されている。このことから、学校場面でも、単元における課題を捉え、自分の課題として受け止めつつ、「私は」課題の解決に向けてどのように取り組むか、「私にとって」どのようにすると解決に向かうか、といった道筋を自分自身で明確にすることが重要になる。明確にした上で（自分の航路を考える）、実際に目標や目標に向けての道筋に沿って実行する（「切り拓く」）ことが重要になる。

こうした生徒の姿の実現に向けては、先述の通り「主体的で対話的で深い学び」の充実を目指すように、「生徒は、何をわかるといいか」「何ができるようになるといいか」というゴール像に向かい、各教科の特質を踏まえて単元という単位で学びをデザインしていくことが重要である。また、生徒の実態やこれまでの研究の積み重ねを踏まえると、単元や授業デザインの中で「振り返る」という営みに焦点を当てて、単元や授業のデザインを進めていく必要がある。

(2) 「生徒を主語にした単元デザインとは」

以下の視点に留意した単元構成のことである。

○生徒が単元や一単位時間のゴール像を捉え、自らの学習に見通しをもつ場の設定

→ゴールに向かう過程の中で、各教科の「見方・考え方」を働かせながら、生徒が必然性をもって解決できる単元（一単位時間）の課題を設定する。

○生徒が自分の学びに責任をもち、自分で学ぶ活動の場の設定

○生徒が一単位時間や単元の終末など、必要な場面で、自らの学習の過程を振り返る場の設定

本校では、「生徒を主語にした単元デザイン」について、次のような手順で構想する。

「見通す」：生徒が単元や一単位時間のゴール像を捉え、自らの学習に見通しをもつ場を設定する。

※**ゴール像**=生徒が何を理解し、何ができるようになればよいか、具体的な生徒の姿

学習の見通し=単元終了までの学習計画

① 学習指導要領に明示されている単元などの内容のまとまりに応じて育むべき資質・能力を確認する。

② 生徒の実態に応じて、どのように資質・能力が発揮されると目標達成となるか、単元や一単位時間のゴール像を、学習終了時の具体的な生徒の姿や発言として想定する。

③ 単元や一単位時間の学習を通して何ができるようになればよいか（ゴール像）、どのように学ぶのか（見通し）を生徒にとってわかりやすい表現で提示し、生徒と共有する。

→ゴールに向かう過程の中で、各教科の「見方・考え方」を働かせながら、生徒が必然性をもって解決できる単元（一単位時間）の課題を設定し、提示する

「学び深める」：生徒が自分の学びに責任をもち、自分で学ぶ活動の場を設定する。	
毎時間の学習過程にアウトプット活動を位置づけるなどして、生徒が主体的に学習に臨むための手立てを計画する。 ※ アウトプット活動 =自分の考えを書いたり話したりして表出する活動	
・学習課題に対するはじめの自分の考えを書いて表出する場 ・ペアやグループでの対話活動のはじめに、各個人の考えを伝える場 ・他者との対話活動をふまえ、再構築した自分の考えを書いて表出する場	 考えの深まりや 広がり
「振り返る」：生徒が一単位時間や単元の終末など、必要な場面で、自らの学習の過程を振り返る場を設定する。	
単元のゴールを想起させ、その達成に向けてどのように学習に取り組んだのか、自らの学習の過程を振り返らせる。 《一単位時間の振り返り》 単元のゴールに向けて、その時間に何ができたか、不十分な点は何か、本時の学習の過程を振り返る。 《単元の振り返り》 単元のゴールに向けて、単元を通して、どのように学習を進めることができたか、不十分な点は何か、単元を通した学習の過程を振り返る。	

「見通す」段階では、単元で達成すべき目標や取り組むべき課題が明確であるか、「航路」の行先を見定める。「学び深める」段階では、自分の考えを組み立てたり、他者にアウトプットしたりすることを通して、目標の達成や課題の解決に向けて、自らの「航路」を歩んでいく。「振り返る」段階では、単元のゴールに向けて、単元を通して、どのように学習を進めることができたか、不十分な点は何か、自らの「航路」を確かめたり、修正したりすることにつながる。つまり、「生徒を主語にした単元デザイン」は、生徒が「航路」を描くための基盤となるものである。

(3) 学びを価値づける「振り返り」とは…

「学びを価値づける」とは 生徒がゴール像に向かって課題や問いを解決しようとした過程で残った学びの成果や学びに関わる意思決定の過程、ゴール像に対してどこまで近づけたかを表現したもののことである。 「学びを価値づける「振り返り」 とは ゴール像に向かって歩んだ過程を「ここまでできた」（軌跡）、「〇〇するともっとゴール像に近づいていくことができる」（現在地や次の目的地）というように、自らの学びの過程や現在地を生徒自身が、評価していくことである。
--

「主体的で対話的で深い学び」の充実に向けた従来の学習指導要領改訂でも、「何を理解しているか」「知っていることやできることをどのように生かすことができるか」といった、知識の理解や思考についてその質を見直していく際に、自らの学びの現在地を理解したり、もっとうまく学びを進めるためのアイデアを考えたりするために「振り返る」ことの重要性が指摘されている(奈須、2017)。また、以上に示した「生徒を主語にした単元デザイン」と同様の学びのプロセスを重視する学習理論を提唱するマーシャル&フレンチ(2024)においても、「振り返りは、生徒を効果的な学習者に育てるための強力な支援ツール」と述べられており、その重要性が指摘されている。さらに主体的な学習者の育成を目的する自己調整学習の理論の中でも、生徒自身が学びの現在地を目標に照らして評価したり、学習方法や方略に関して考え直したりすることの重要性が述べられている(木村、2023)。

マーシャル&フレンチ(2024)によれば、「振り返る」という段階の中には、以下の表3に示す3つの異なる方略があるとされている。「計画」「モニタリング」「評価」という3つの方略が相互に作用し、学びのゴールに向けての支援とな

る。「振り返り」の段階性は、主体的な学習者の育成を目指す自己調整学習においても、「見通す」「実行する」「振り返る」という3つのフェーズが循環することで、自分の学びを調整したり、新たな学びに接続したりすることにつながる」と指摘されている（木村、2023）。

表3：「振り返り」に含まれる方略

計画	生徒が、現在の理解度や課題の難易度、課題への取り組み方、あるいは課題終了時の成功のイメージを把握できるようにする
モニタリング	生徒が自分の理解度や学習に対する態度、あるいはパフォーマンスを調整できるようにする
評価	生徒が個人または共通の規準を用いて（学びの成果を）評価できるようにする

（マーシャル&フレンチ（2024）より一部改編の上、掲載）

本年度の研究では、「振り返り」が形式的なものとなってしまっている課題を脱却すべく、表3の知見を踏まえて、振り返りの目的や機能に注目した研究を進める。また、研究主題に示す「自らの「航路」を切り拓く」という狙いを設定していることや生徒を主語にした単元デザインの研究成果を踏まえ、「モニタリング」や「評価」に注目した「振り返り」を推進する。

生徒自身の「モニタリング」や学びの「評価」を支援するために、次頁に示す【資料】のような、ワークシートを用いること想定している。ワークシートの中には、単元（授業）のゴールに対する「自らの理解度」、ゴールに向かっていくために有効だった手段や方法を言語化する部分を設けている。このワークシートを用いることで、学びの過程に対する「モニタリング」や「評価」を促すことにつなげたい。つまりは、自らの「航路」を確かめたり、「航路」を修正したりするための支援として、「振り返り」の段階を機能させることを目指す。

また、「振り返り」の段階を効果的に機能させていくためには、【資料】以上の教師の働きかけが必要である。以下に示す表4は、生徒の「振り返り」を促すときに注目する点をチェックリストにしたものである。以下の表を踏まえれば、「振り返り」が、学習内容の理解にとどまらず、生徒の学習過程を「モニタリング」する際にも、生徒自身が決めた学習方法や方略、環境、時間配分等に注目して振り返ったり、生徒の学習の成果を「評価」する際にも、「うまくいったこと・うまくいかなかったこと」以上に「うまくいったこと・うまくいかなかった要因」を分析したり、次の学習とのつながりを考えたりすることも含まれている。【資料】のワークシートに加えて、振り返りのための焦点化や足場かけが必要である。以上のようなワークシートや「振り返り」の方略を踏まえて、学びの「質」に注目できる「振り返り」への転換を目指す。

表4：「振り返り」で焦点化するチェックリスト

見通す	課題	課題理解	☐ 課題を分解していたか ☐ 分解した課題の関係を考えていたか ☐ 解決策を考えていたか		
		課題興味	☐ 課題に興味を示していたか ☐ 課題に価値を感じていたか		
	目標	目標設定	☐ 問いを広げていたか ☐ 問いを順序立てていたか ☐ 問いを絞っていたか		
		目標志向	☐ 目標がどのような能力を向上させることに結びつけているのかを考えていたか		
		結果予期	☐ 学習の最後に創り上げるもの（価値）を予想していたか		
	計画	計画立案	☐ 学習活動を決めていたか ☐ 方法・方略を決めていたか ☐ 時間配分を決めていたか		
自己効力		☐ 学習をうまく実行することができるかを考えていたか			
実行する	確認	実行確認	☐ 課題・目標を確認していたか ☐ 方法・方略を確認していたか ☐ 時間配分を確認していたか		
		自己指導	☐ 自分に質問するようにして学習の進捗を確認したり、内容の理解を深めようとしていたか		
		自己記録	☐ 学習の進捗について確認したことや、学習中に大切だと思ったことを記録していたか		
		意識観察	☐ 学習に向かう自らの意識（気持ち）を確認しようとしていたか		
	調節	実行調節	☐ 課題・目標を調節していたか ☐ 方法・方略を調節していたか ☐ 時間配分を調節していたか		
		興味促進	☐ 困難な課題をやりがいのある挑戦に転換しようとしていたか		
		環境構成	☐ 学習しやすい環境を整えようとしていたか		
		援助要請	☐ 学習がうまく進まなかったり、時間が足りなかったりした際に他者に相談していたか		
振り返る	評価	自己評価	☐ うまくいったことが何かを考えていたか ☐ うまくいかなかったことが何かを考えていたか		
	帰属	原因帰属	☐ 評価結果の理由を考えていたか		
		自己満足	☐ 自らの学習結果に納得した上で、その後の学習に活かそうなどについて考えていたか		
	適用	適用	☐ 次の学習にどう活かすかを考えていたか		

（木村（2023）より、掲載）

学びの航路記録シート

日付：

教科：

単元名：



【振り返りとまとめ】

【ここまでわかったこと】

【こんな方法で進められた】

【初期の目標】

➡【次への一歩】

3 研究の目標

自分の目標や課題の解決に向けて「航路」を調整しながら歩みを進める生徒の学びを創造するために、有効な単元・授業デザインの在り方、その過程における「振り返り」の在り方について究明する。

4 研究の内容

【生徒を主語にした単元デザイン】

- 具体的な生徒の姿として単元のゴール像を想定して単元構想を練り、ゴールに向かう過程の中で、各教科の「見方・考え方」を働かせながら、生徒が必然性をもって解決できる単元（一単位時間）の課題を設定すること。
- 一単位時間の中にアウトプット活動を位置づけるなど、生徒主体とするための手立てを計画すること。
- 一単位時間や単元の終末など、必要な場面で、自らの学習の過程を振り返る場を設定すること。

【学びの軌跡や現在地を価値づける「振り返り」】

- 学びの航路記録シートをはじめとしたワークシートを用い、生徒の学びの調整に有効な「振り返り」の時間を設定すること

5 具体的方策

○校内全研の実施（6月）

- ① 代表者の授業公開及び参観
- ② 各グループでの意見交流会
- ③ 講話（外部講師）

○主題研究に基づく授業公開（9月～12月）【1人1回】

- ①8月夏季研修における各教科での授業検討会の実施（単元デザインシート及び授業公開シートの作成 ※研修会までに）
- ④ 授業公開及び参観（シートの修正及び提出 ※授業公開日3日前までに）
- ⑤ 意見交流会（授業公開日の放課後）

○各教科の成果と課題作成及び共有（1月上旬）

- ・校内研修会にて各教科内で協議の上、成果と課題をまとめる

○研究のまとめ作成及び来年度に向けた審議（2月）

- ・研究のまとめの共有
（単元デザインシート、授業公開シート、各教科の成果と課題を1つのPDFデータにして全職員に配付）
- ・主題研に関するアンケートの実施
- ・来年度の方向性に関する審議（研究推進委員会）

【引用・参考文献】

カーラ・マーシャル、レイチェル・フレンチ（遠藤みゆき、ベアード真理子訳）（2024）『思考する教室をつくる—概念型探究の実践—』北大路書房

木村明憲（2023）『自己調整学習—主体的な学習者を育む方法と実践—』明治図書

田村学著（2018）『深い学び』東洋館出版社

中央教育審議会（2025）『教育課程企画特別部会 論点整理』

（https://www.mext.go.jp/content/20260129-mxt_kyoiku01-000045057_01.pdf）最終閲覧日
2026年2月26日

奈須正裕（2017）『「資質・能力」と学びのメカニズム』東洋館出版社

福岡県教育委員会（2025）『令和7年度全国学力状況調査及び福岡県学力・学習状況調査 調査報告書』

（<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/site/kyouiku/r7zenkoku-kengakutyohoukokusyo.html>）最終閲覧日
2026年2月17日

文部科学省（2020）『中学校学習指導要領解説総則編』